

I 研究の動機とねらい

次期学習指導要領の改訂に向け、国立教育政策研究所が「21世紀型能力」として報告しているものがある。これは「『思考力』を中核とし、それを支える『基礎力』と、使い方を方向付ける『実践力』の三層構造で構成」されている。

現在は上記のように大枠で示されているため、現場の教員が「思考力とは何か、どのような要素があり、授業にそれを埋め込むにはどうしたらよいか」を工夫していかなければならない。そこで、今回は「思考力」に焦点を当て、以下のことを軸に実践を進めた。

- 1, 表現主体（筆者・語り手）には、伝える目的（伝えたい内容と伝える対象）があること。
- 2, 目的に応じて表現主体は物事の違う面を見ていて、伝える内容が変化すること。
- 3, 表現主体はそれぞれに価値観があり、それによって物事を判断し、伝えていること。
- 4, それぞれの論理がどのように成立しているかを、捉えること。（三角ロジックの活用）
- 5, データと文章を照合して確かめること。

これらは、情報を鵜呑みにせず、自立した言語生活を送る主体者として必要な視点であると考え。情報には必ず表現主体があり、表現されたものには対象意識（文章であれば読み手意識）があり、何を、どう捉え、どのように伝えるかということが表れる。それを客観的に、情報主体の視点に入って読もうとすることで、クリティカルな読みの力につながると考える。

また、文章に挙げられているデータについては、できるだけ元のデータにあたることもよりよい言語生活には必要である。「情報主体の視点」「論証構造の検討」「データの検証」ということを通して、情報を自分で確かめ、熟考し、評価するという力をつけることは、これからさらに進むであろう情報化社会において必要な態度、能力であると考え。

ただし、批判的に読むことは、否定的に読むことではない。主観をできるだけ交えず、表現主体の論理を読むということであり、メタな読みが求められる。メタ認知能力は「21世紀型能力」の要素としても挙げられており、授業実践の中で育成していくべき重要な資質・能力である。表現主体を読むという視点は他者の視点に立って読むということであり、そこではメタ認知能力も働くため、読解力を高めながら、メタ認知能力の向上も期待できると考える。

4に挙げた三角ロジックであるが、生徒に意見を求めると、根拠は挙げられるが理由付けがあいまいであったり、根拠すら挙げないということがある。他者の論理を捉えることや、自分の論理を構築すること、さらには自分と他者の論理を比較検討するにも三角ロジックを用いることが有効であると考え。

以上のような視点をもって、生徒にクリティカルリーディングという読解方略を学ばせながら、思考力・メタ認知能力の育成を図ることを目指した。

II 実践の概要

- 1, 使用題材 読売新聞 2015年5月2日社説「温室ガス削減 原発活用で高い目標に挑もう」
朝日新聞 2015年5月4日社説「温室ガス目標政府案は意欲に欠ける」

クリティカルに読むと言っても、分析の視点がなければ、生徒はただ否定的に文句をつけるような読み方をしてしまう。そこで、批判的に読むための視点として以下の点を本実践までに他の題材を用いて指導した。

- ① 二値的思考（Aか、Aでないか）によって極端な意見になっていないか。
- ② 事実と推論を区別して結論を出しているか。
- ③ 総称的ステートメント（すべてを知っているという態度での論じ方、決めつけ、他の条件や可能性の無視）が使われていないか。
- ③ 論理の飛躍はないか。

（参考 マーティン H. レビンソン、GS思考法、文教大学出版事業部）

これらの視点をもって読むことで、単なる否定ではない、合理的な判断ができると考える。

また、今回はクリティカルリーディングの手順については、それを詳細に学ぶことを目的にしていなかったため、主張（意見）とその根拠を見つけるということにとどめ、それらをグラフデータと対照させて考えることを優先するようにした。

そしてさらに、「なぜこのように書かれているのか、その意図は何か」ということについて、表現主体（筆者）の視点で検討させた。

2, 授業の流れ

まず、読売新聞の社説を用い、意見と根拠を明らかにした。

（資料として2015・5・2 社説 読売新聞 を使用）

次に朝日新聞の「温室ガス削減目標」についての社説と比較した。

（資料として2015・5・4 社説 朝日新聞 を使用）

以下に授業の流れを示す。（・のあるものは、生徒の意見）

- ① プリント配布、範読、班で1文交代で音読
- ② 主張がされている文に線を引く

- ③ 主張に対する根拠が書かれているのはそれぞれの段落かを読みとる
- ④ 上記の手順を読売新聞社説、朝日新聞社説で行う。
- ⑤ 両社の社説を比べてみて、気づいたこと、考えたことを発表する。
 - ・全く反対の意見が書かれている。
 - ・この間にあたる意見が書かれた新聞はないのかな。
- ⑥ なぜこのような違いが生じるのか、その理由を考える。
 - ・価値観の違いがある。
 - ・視点が違う。
 - ・読み手に対して、新聞社として訴えたいことがある。
 - ・朝日新聞は読売新聞より2日後の社説なので、読売新聞に反論したい意図があるのでは。
- ⑦ それぞれの社説から読み取れる価値観はどのようなものかを捉える。

【読売新聞】

- ・環境のことも考えながら、経済を大切にしている。
- ・原発を推進しようとしている。

【朝日新聞】

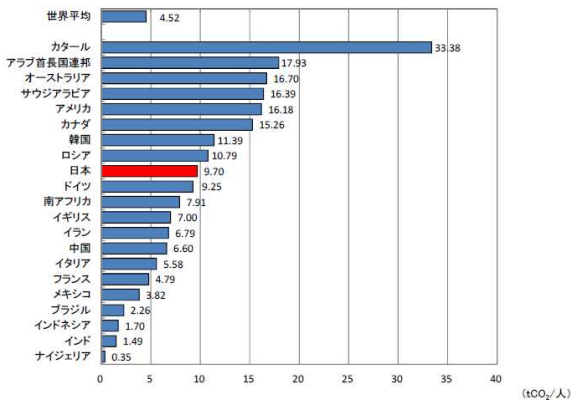
- ・経済も大事にしているが、より環境重視に思える。
- ・原発に反対している。

- ⑧ 温室効果ガスに関するグラフと両社の社説を対照して、社説に書かれている数字にあたるグラフの数字を○で囲む。
次に、気づいたこと、考えたことを発表する。

【資料 温室効果ガス排出量の現状等について 経済産業省 HP より抜粋】

(http://www.meti.go.jp/committee/summary/0004000/pdf/042_s05_00.pdf)

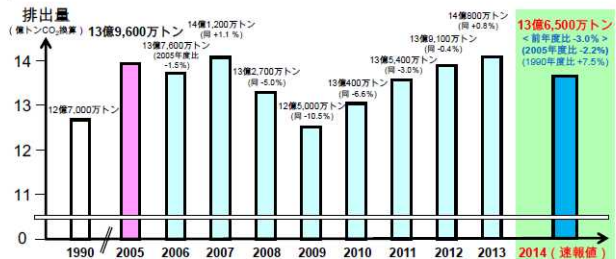
主な国別一人当たりエネルギー起源CO₂排出量(2013年)



出典：IEA「CO₂ EMISSIONS FROM FIREF COMBUSTION」2015 EDITIONを元に整理されたもの

我が国の温室効果ガス排出量(2014年度速報値)

- 2014年度(速報値)の総排出量は13億6,500万トン(前年度比-3.0%、2005年度比-2.2%、1990年度比+7.5%)
- 前年度と比べて排出量が減少した原因としては、電力消費量の減少や電力の排出原単位の改善に伴う電力由来のCO₂排出量の減少により、エネルギー起源のCO₂排出量が減少したことが挙げられる。
- 2005年度と比べて排出量が減少した要因としては、オゾン層破壊物質からの代替に伴い、冷蔵分野においてハイドロフルオロカーボン類(HFC)の排出量が増加した一方で、産業部門や運輸部門におけるエネルギー起源のCO₂排出量が減少したことが挙げられる。



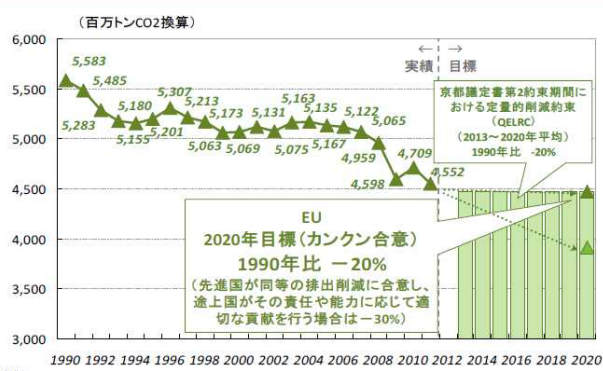
注1 2014年度速報値の算定に用いた各種統計等の年報値について、速報値の算定時点で2014年度の値が未公表のものは2013年度の値を代用している。また、一部の算定方法については、より正確に排出量を算定できるような措置を行っている。このため、今回とりよめた2014年度速報値と、来年4月に公表予定の2014年度速報値との間に差が生じる可能性がある。なお、速報値では、森林による吸収量については算定、公表する予定である。
注2 各年度の排出量及び過去年度からの増減割合(2005年度比)等には、京都議定書に基づき吸収活動による吸収量は加味していない。

GHG排出量の推移及び2020年削減目標 ~ 米国 ~



(出典) 気候変動枠組条約事務局ホームページより

GHG排出量の推移及び2020年削減目標 ~ EU ~



(出典) 気候変動枠組条約事務局ホームページより

※ QELRC (Quantified Emission Limitation and Reduction Commitment)

- ・アメリカもEUも、排出量が多いところを基準にしている。日本も2013年は比較的多い。
 - ・EUは排出量がだんだん下がっている。アメリカは2007年くらいから下がっていく傾向がある。
 - ・日本は2009年が低いけれど、そこからまた増えていっている。
 - ・2014年の速報値では下がっている。
 - ・国別一人あたりだと、カタールが多い。国民の数によって、数値がかなり違うとわかる。
 - ・2011年に原発が止まったけれど、2009年から排出量は増えている。
 - ・1990年は排出量が比較的小さい。どうして朝日新聞はここを基準にしたいのだろう。
 - ・日本が2013年を基準にしたいのは、アメリカやEUと同じ、高いところを基準にしたいからか。
- といった意見が出された。これらの意見を見ると、生徒はグラフと文章を対照させることで、グラフや数値を根拠に主張する場合でも、どの年度の数字を基準とするのか、何を基準として比較していくのかというこ

との中にも意図が働いていることに気づいている様子がある。

次に、自分がどのようなことを学んだかを書かせた。以下に生徒が書いたものをいくつか挙げる。

- ・新聞にも価値観が表れていたりするので、主張を様々な視点で見ることで、主張が妥当かどうかわかるようにしたい。
- ・文章を読んだだけではこっちに賛成、とか思っていたが、グラフと照らし合わせるとまた違う考えになった。
- ・新聞やそのほかのメディアなども、筆者の価値観によって決めつけがあったり、部分を全体として捉えたり、根拠も自分の意見を尊重するものだったりすることがある。他の意見を読んだり、このようなところに注意して読んだりしたい。
- ・私はいつも新聞や携帯のニュースを見て、それを信じ切っていたが、この学習をして、根拠に妥当性があるか、それが正しい情報かを考えたいと思った。

最後に、授業者から「ものの見方は多面的で、自分の価値観によって見えるものが違ったりする。他の人の視点に入って考えることができるようになってほしい。環境問題についても様々な立場からの意見があり、どれが絶対に正しいと言うことはない。よりよい解決やよりよい方向性を探せるように、今回勉強したことを活かしてほしい」と伝え、授業を終えた。

Ⅲ 考察

昨年度の反省であった「批判的」と「否定的」が区別については、授業中にも「否定するのが目的ではなく、あくまでも論理を読み取ることが目的」と、目的をはっきりするようにしたことで、生徒の感想を読んでも改善されたと感じる。

ノートや発表した内容から、生徒は表現主体の持つ読み手への意識や、どのような価値判断に基づくものか、通底している思想は何か、ということに気づくことが出来ていたり、情報を鵜呑みにせず比較したりデータを探したりして考えたいという情報に対する態度についての記述が感想に多く書かれていたりするため、この点についても一定の成果があったと考えられる。

ただし、批判的読解力については、1回の取組で簡単に育つものではない。三角ロジックを用いることを日常的に行い、聞く・話す・書く・読む全ての領域で思考力を働かせるようにしたい。また、どのような評価問題によって学習したことを学力として測るかについても課題である。学習と評価を一体にしつつ、他の文脈で学んだことが活用できるかということについて、教材や授業を考えていく必要がある。そうでないと、一つ一つの単元の授業が打ち上げ花火のようになってしまい、学習の転移が起きない可能性が高くなる。学力観を軸に、系統性を持つ取組の必要性がある。

授業としてはグラフが出てきた段階での情報が多く、処理に苦勞している生徒がいた。作業を細分化して、板書や表示装置を用いて情報を整理する必要があった。中学1年生に社説は難しいだろうと承知していたが、このレベルを「読める」ということを中学校卒業までの一つの目標にしている。また違う文脈を用いて、生徒の学力定着を図っていきたい。

参考文献

- ・小野田博一、論理思考力を鍛える本、日本実業出版社、2002年8月20日
- ・マーティンH. レビンソン、GS思考法、文教大学出版事業部、2011年10月15日
- ・福沢一吉、論理的に読む技術、サイエンス・アイ新書、2012年12月25日
- ・資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書Ⅰ、国立教育政策研究所、2015年3月
- ・奈須正裕・江間史明他、教科の本質から迫るコンピテンシーベースの授業づくり、図書文化社、2015年11月20日